

はこだてし おおふねえふいせき
函館市 大船F遺跡 (登録番号 B-01-305)

所在地：函館市大船町394ほか
発掘原因：国道278号函館市尾札部道路建設工事
発掘面積：230㎡
発掘期間：令和3年5月19日～令和3年6月30日
調査主体：函館市教育委員会
調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団
担当者：函館市教育委員会 福田 裕二，小林 貢
調査者：(一財)道南歴史文化振興財団 黒沢 健明（調査担当者）

調査の概要

大船F遺跡は、函館市大船町に所在する角張川左岸に沿って東西に細長く遺跡範囲が広がっている。今年度調査区はその東端にあたり、南は角張川、東は大船漁港を眼下に見下ろす急崖の上に立地した標高約48mの地点である。ここより北方向へは数百メートルに亘って海岸線に迫る急崖上の平坦面が続くが、周知の遺跡は所在しない。大小いくつかの沢を越えた南東400m程には大船B遺跡が所在する。

調査は縄文時代前期以降の遺物包含層（Ⅲ層）と、駒ヶ岳火山灰[Ko-f・g]（Ⅳ層）の下にある縄文時代早期の遺物包含層（Ⅴ層）について実施した。

Ⅲ層調査

Ⅲ層の調査で検出した遺構は、竪穴建物跡1軒、竪穴状遺構1基、土坑2基、柱穴状土坑1基である。竪穴建物跡は調査区南側の角張川に面した縁辺部で検出され、斜面の自然崩落によって半分程を消失しているとみられる。遺構の時期を特定できる遺物は出土していない。

遺物は約700点出土した。土器は後期初頭の天祐寺式が主体的に出土していることから、調査区内で検出された遺構も概ねその時期と考えられる。

Ⅴ層調査

Ⅴ層の調査で検出した遺構は、焼土3ヵ所、剥片集中2ヵ所である。Ⅴ層の地形は山側から海側方向へと沢状の窪地が2条調査区内を横断しており、大小無数の礫が覆っている。角張川に面した縁辺部の一角で礫の分布が希薄な範囲があり、その周辺で剥片集中や土器のまとまりが確認されたが、人為的に礫を除けて空間を確保したものかは判然としない。沢状地形の窪地部分では厚く堆積したⅤ層中から火山灰らしき薄層が確認され、南茅部地区ではこれまで確認されていない火山灰の可能性はある。

遺物は約1,300点出土した。土器は根崎式、中茶路式、東釧路Ⅳ式などが出土し、復元可能な個体も複数あるものとみられる。石器は石鏃、つまみ付ナイフ、石斧、擦石、石皿などが出土している。無数の礫に覆われた沢状の地形や石皿と擦石が出土する様は豊崎Q遺跡で作業場的空間とした様相と類似する。



調査区全景（南側上空より）



V層完掘全景（東側より）